

介助犬を 知って いますか?

1

障害を もつと いうこと



きむら よしとも
木村佳友 1960年大阪に生まれる。半導体製造会社勤務(コンピュータ・プログラマ)。日本介助犬アカデミー理事。財団法人プラザ・コム評議委員。関西学院大学非常勤講師。厚生労働省・介助犬の訓練基準に関する検討会委員、介助犬及び聴導犬の認定基準等に関する検討会委員、介助犬訓練者研修カリキュラム検討会委員、兵庫県・介助犬認定基準等検討委員会委員。著書に『介助犬シンシア』(毎日新聞社)、『介助犬を知る』(名大出版)。

昨年五月、衆参両院において全会一致で成立した法律がある。

障害者が公共施設へ盲導犬・介助犬・聴導犬を同伴することを保障した身体障害者補助犬法だ。

二七歳のとき通勤途上のオートバイ事故で頸髄を損傷した私は、現在介助犬のシンシアと暮らしている。

事故に遭う前は、スキーやウインドサーフィンなどスポーツが大好きで、自分が車椅子の生活になるとは夢にも思っていなかつた。事故で動かなくなつた手足もりハビリに励めば元どおりになり、數ヵ月後に控えた米国学会でも研究発表できるものと信じていた。しかし受傷から三ヵ月を過ぎても私の状態は相変わらずであり、ある日主治医から「君は一生車椅子の生活になる」と告げられた。到底信じがたく、受け入れられない瞬間だった。自暴自棄になり家族にも迷惑をかけた。

事故後数ヵ月はベッドで寝たきりの状態であったが、車椅子に乗せてもらい病院の中を散歩できるようになると、自分

と同じように事故で障害を負つた人を目ににするようになった。車椅子で懸命に中庭の坂を登る青年。口でくわえた棒でキーボードを操作する人。みんな同様に一度は希望を見出せず、死ぬことを考えた人たちだ。それでも病院のリハビリ室はにぎやかで明るい。患者同士気心が知れてくれるとき話もはずみ冗談も言い合うようになつた。私もようやく明るさを取り戻し、リハビリに精を出すようになった。

入院生活も一年半になつた頃、会社と病院側、私とで今後のことを相談するカンファレンスがもたれた。「とにかく会社へ復帰したい」という私の意向に対し、「どうやつて会社へ通うのか?」が問題となつた。漠然と考えていた職場復帰の望みが簡単ではないこと、そのためには解決しなければならない多くの問題があることを思い知らされた。

待望の自宅での生活が始まつたが、入院中はある程度身の回りのことができたつもりでも、妻も仕事に出かけた日中を一人で過ごすことは大変であつた。着替え、洗面、食事など、日常生活動作のかなりの部分を看護師さんに助けてもらつていたのだと気づかされた。

会社とは退院後も職場復帰について話し合いを続けていたが、「毎日の通勤は難しいのでは?」との判断から、上司が会社に在宅勤務をかけあつてくれた。また胸から下は汗をかけないため、体温調節がうまくできないなど目に見えない障害を抱えている。

毎日の通勤に自信がなかつた私にとつて、在宅勤務は願つてもないことだった。しかし、当時はまだ珍しく、私の会社でも前例がなかつたため正社員ではなく嘱託社員としての再雇用となつた。

「一年契約の嘱託社員、給与は社員の最低水準、月に一・二度出社する、仕事は英語論文の翻訳とデータベース・システムの作成など」と、上司が気の毒そうに条件を伝えてくれた。正社員として復職できないことや低賃金を気にしているのだろうが、私には仕事ができるだけでも十分だつた。事故から四年半、ようやく私の願いが叶つた。

(つづく)

その後私は職場復帰を目指して、車の運転訓練を受けるためリハビリテーションセンターへ転院した。結婚して一年あまり、子どものいない私にとって経済的にも介助面においても妻の負担ができる

